

4)コナジラミ類(ナスにおける発生調査基準の検討)

1. 調査背景と目的

調査実施基準が未策定である害虫について、発生動向を的確に把握する調査やその調査結果に基づく発生予察手法をとりまとめ、新たな発生予察調査実施基準(案)を策定した。本年は、発生予察調査実施基準(案)に基づいて現地実証を行い、実用性を評価する。

2. 調査方法

1) 巡回による調査

(調査地点)

県内9地点の露地ナスほ場。

(調査方法及び調査項目)

ほ場の端の畝と中央部の2箇所について、1箇所25株の合計50株で、各株任意の中位葉を2葉選び、成幼虫の寄生虫数および寄生葉率を調査する。

(調査時期及び調査間隔)

調査は6～9月に各月1回行う。

(現行の病害虫調査との比較)

従来の調査：1ほ場あたり50株(株あたり上・中・下位葉を各1葉および1花)

対象病害虫：灰色かび病、うどんこ病、半身萎凋病、青枯病、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、アザミウマ類、ハモグリバエ類

3. 調査結果

1) 巡回による調査

コナジラミ類の発生は調査期間を通じて認められ、大半のほ場では9月まで増加した(図1)。発生密度は最も高いほ場で1葉あたり0.16頭の発生であり、何れのほ場でも被害発生は認められなかった。葉あたりの寄生頭数と寄生葉率の関係は河野・杉野式(1958)に適合した(図2, $R^2=0.851$)。オンシツコナジラミ、タバココナジラミともに発生がみられ、一部混発ほ場もあったが、種の識別の必要性は低いと考えられる。2人1組で1ほ場を調査したが、所用時間は6～10分程度であった。

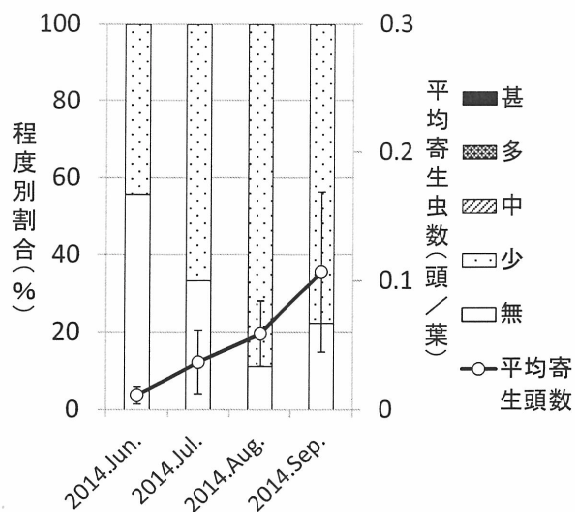


図1 露地ナスほ場におけるコナジラミ類発生程度別割合と平均寄生虫数の推移
※図中のバーは S.E.(標準誤差)

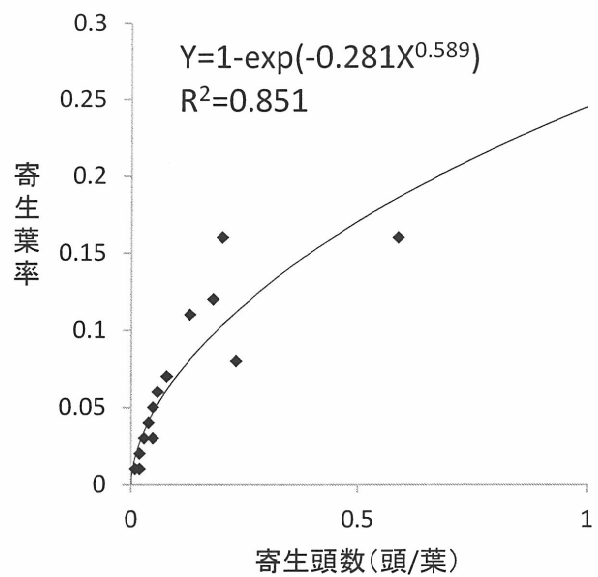


図2 寄生頭数・寄生葉率の関係と河野・杉野式によるあてはめ

4. 考察

発生推移は多くのほ場で一致しており、露地栽培であっても本調査により、適切な発生動向の把握が可能と考えられた。また、寄生葉率と寄生頭数の関係は河野・杉野式によく一致し、寄生葉率の調査によって、効率的な省力的な調査が可能であった。

本県で行っている他の病害虫調査と並行しても、無理なく調査を実施できた。ただし、何れのほ場でも発生密度は無～少程度であったため、発生量と調査時間の関係については不明である。

5. 今後の課題

なし

6. 要約

コナジラミ類の発生予察調査手法の実証のため、栃木県内の露地ナスほ場9地点について、調査を行った。その結果、本調査法は発生状況の把握に有効であり、労力的にも問題無く実行できると考えられた。